

人が、街が失われた2011年3月11日の“あの日”。今、ゆっくりと未来へ歩み始めた。被災地の復興に挑む医療者たちの心を届ける

あの日から、
未来へ

南相馬市立総合病院
院長

金澤幸夫氏



震災から3年 原発事故処理、除染は

東日本大震災、原発事故から3年が過ぎた。原発事故処理はなかなか進まなかったが、13年11月18日より4号機内の燃料棒1533体の搬出、100メートル離れた共用プール内への移送が開始され14年4月末まで770体が移送された。今年末までは全て移送される予定であるが、1～3号機には1573体の燃料棒が存在する。13年8月ごろより汚染水問題が新聞紙上を賑わせている。1～4号機には1日1000トンの地下水流入があり、400トンは原子炉建屋に流入し600トンは一部汚染され海に流れる。原子炉冷却のため1日処理水400トンが原子炉建屋に注入され、建屋に流れ込む地下水400トンと合わせ800トンがタービン建屋から1次貯蔵所に集められる。セシウム除去装置、淡水化装置を経て400トンは原子炉冷却に再利用、1日400トンが貯水タンク保管となり、地下水のコントロールが必須である。14年5月21日、1～4号機の山側でくみ上げられた地下水の海への放出が始まり、6月2日には原子炉建屋を凍土で囲む工事が始まった。

南相馬市の人口は7万人から5万人に減少、14年1月現在仮設に5404人、借り上げ住宅に6180人が暮らしている。避難指示解除準備区域の南相馬市小高区は国直轄の除染区域であるが、汚染土壌の仮置き場の確保が困難で大幅に遅れ、完了は3年間延長され16年3月となった。南相馬市が行う除染の完了も仮置き場の確保の遅れや作業員不足で同様に16年3月に延長された。13年12月14日、



南相馬市立総合病院に勤務する(左から)藤岡将氏、岩崎良平氏、澤野豊明氏、河野悠介氏

国は福島県・地元4町に東電福島第一原発周囲を国有地とし汚染土壌などを保管する中間貯蔵施設設置の依頼を行ったが、まだ結論は得られていない。また災害公営住宅の整備も遅れており仮設住宅から一般住宅への移動はまだまだ先のことになると思われる。

除染費用は2兆円から5兆円に膨らむと予測されている。13年11月現在、市町村の除染に1万5000人、国直轄の除染に1万人の計2万5000人が福島県で除染に従事しており、多くは県外からの作業員である。南相馬市でも約2000人の除染作業員が働いているが、一部の作業員による事件やトラブルで治安の悪化が問題となっている。福島県全体で12年には26人の除染作業員が摘発、13年は11月末で161人が摘発されている。内容はけんかや酒に酔って殴ったなどの傷害や空き巣などの窃盗が多くを占める。

また、暴力団の関与も指摘されており労働者派遣法違反の疑いで山形県、高知県の暴力団幹部が逮捕されている。最近、当院医師から、アパートの駐車場に除染作業員が勝手に車を駐車しており、その車を見ていたら酔った作業員5人が現れ「車を盗む気か」とからまれ怖くて逃げたとの報告を受けた。

原発事故処理、南相馬市には問題が山積しているが、当院は着実に復興している。当院の実勤務看護師数は嘱託を含め震災前129人、今年4月1日現在で123人と震災前に大分近づいた。看護師不足で4病棟中1病棟が閉鎖のままであるがもう少しで開けられそうな状況になりつつある。今年4月1日より宮内嘉玄先生(放射線科、愛媛県松山市より)、社本博先生(脳外科、沖縄県石垣島より)が当院勤務となった。今年5月1日より名戸ヶ谷病院で初期研修を終えた嶋田裕記先生が後期研修医として脳外科研修を開始した。初期研修医は研修2年目の河野君、藤岡君、今年4月より岩崎良平君(東京医科歯科大)、澤野豊明君(千葉大)が加わり4人となった。また地域医療研修医も月に2人ほど訪れており、さらに福島県立医科大学6年目の地域医療実習生もおおり、病院は大分若返った。